

第8部

インターネットを用いた高等教育環境

Patcharee Basu, Achmad Basuki, Achmad Husni Thamrin, 大川 恵子, 渋谷 雪絵,
工藤 紀篤, 石原 学, 前川 貞夫 マルコス

SOI Asiaプロジェクト(Schoolon Internet Asia、<http://www.soi.asia/>)では、2001年からインターネットがまだ整備されていない発展途上の地域に即時的にインターネット基盤の整備を行い、この基盤を利用した遠隔での講義共有を始めとする教育協力を可能とする環境を構築し、遠隔教育に関する実証実験を行ってきた。2008年よりUNESCOと協力して、アジア各国の研究教育ネットワーク(REN)を連携した教育協力基盤として“CONNECTAsia”を立ち上げ、教育プログラムの共同開発、実施を推進している。2011年度は、CONNECTAsiaのパートナーと協力して、エネルギー、サステナブルサイエンス等、地球温暖化問題など、グローバルな問題についてのコースを実施した(第2章)。

SOI Asia環境で実施する教育の分野は、前述に加えて、ICT、アントレプレナーシップ教育、海洋科学・工学など幅広く実施しているが、2011年度は、シンガポール国立大学を中心として医学教育についてのネットワークを構築する“Medical Education Network Initiatives”という試みが開始され、APANのメディカルチームとの協力体制を模索中である(第3章)。

UNESCOとCONNECTAsiaでは、アジアの学術ネットワークの可能性をより多くの人に知ってもらうためのイベントCONNECTivityを11月24日に開催し、世界各地よりオンラインでゲストを招いて実施した、Green Societyについて考えるTeleSeminarは、アジア全域で2000人以上が視聴した(第4章)。

また、ディスカッションを中心とした教育プログラムAGORasia Workshop、AGORasia Youthなど、新しいスタイルの学びの場の創造にもチャレンジしている(第5章)。

実際にリアルタイムに複数拠点で授業を共有する現場では、授業資料をどのように快適に共有するかが常に問題となっている。SOI Asiaでは、2008年よりLivePresenterというWeb上のフラッシュプラグインを利用した資料同期システムを開発して利用してきたが、2011年度では、このHTML5版のプロトタイプを開発した(第6章)。

SOI Asiaのネットワーク管理および授業運営には、アジアの各大学のオペレーターが大切な役割を担っているが、オペレーターの入れ替わりは比較的頻繁で、各大学が自律的にオペレーター教育を行う枠組みが望まれてきた。SOI Asiaでは、オペレーターワークショップを定期的に行ってきたが、2011年度は、そういった要求に答えて、VM(仮想マシン)を利用した自習型(セルフペース)のトレーニングコースを開発し、各大学のニーズにあった時期にそれぞれに実施することを可能とした(第7章)。

今年は、3月11日大震災を受けて、各種サービス、ネットワークなどを、災害時にも継続的に維持するための様々な検討を行い、SFC以外の場所(マレーシア)からのUDL衛星打ち上げの準備、SFCのネットワークに問題が出た場合の西日本のみのマルチキャストオペレーション、各種サービスのクラウド化などを推進した(「第22部 Asian Internet Interconnection Initiatives」参照)。震災発生後直ちにSOI Asiaパートナーは、政府発信情報を即座に多国語化翻訳に協力するなど、日常的に機能している強力なコミュニティが災害時にも機動的に機能したことを示した(「第1部第4章 EQプロジェクト報告書」参照)。また、WIDEプロジェクトが実施した震災支援活動の一環として、大震災の影響で中止になった大学の卒業式、学位授与式を、インターネットを利用してよりインタラクティブに参加してもらうための試みをサポートした(第8章)。

2011年11月8日～10日、University of Computer Study Yangon (UCSY, ミャンマー連邦共和国)において、SOI AsiaのBi-Annual Meetingを開催し、SOI Asia 10周年を記念するシンポジウムを実施した。UCSYは2001年にパートナーとなり、2002年1月にUDLサイトの設置を完了した初期サイトの1つである。当初インターネットが無いキャンパスにUDLサイトを構築し、マルチキャストパケットを受信することで授業を受講することが可能となった。以来10年間の協力関係の中で多くの授業共有、インターンの受け入れ、学生指導、IT教育に関する協力などの実績をあげてきた。開始当時から現地のインターネット環境も大きく変わってきたが、UCSYの技術者によって姉妹校であるUCSM (マンダレー校)のサイト構築が行われたこと、ミャンマー国内の分校を結ぶe-learningシステム構築をSOI Asiaオペレーター達が担っていることなどから、本プロジェクトの実績は確実に実を結んでいると言える。現在ミャンマーは、UCSYを中心にTEIN4への参加を検討しており、ネットワーク環境の充実が期待されるが、それに伴いIT人材教育の重要性も高まっている。今後も協力関係を強化していく予定である。